

八ノ集  
甲





越富山

玉麻父翁著

八八集

甲乙

書肆

玉琬館



八八集叙

上之能新古之能。古之能猶今之  
 能。古之能不一。新之能不一。能  
 之。能。法。文。世。世。分。分。同。同。之  
 法。耳。以。未。能。如。考。擬。也。不。徒。能  
 後。獻。美。上。以。擬。新。務。正。以。得





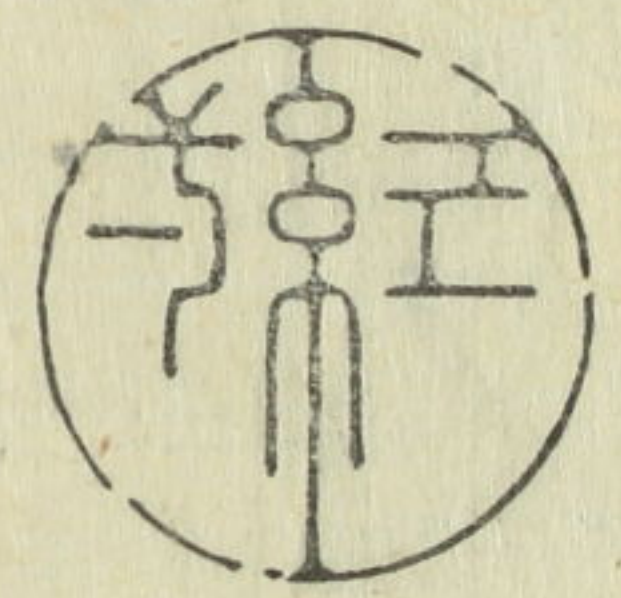
夫里可也。然矣。故子能之。彼  
正。諺古。而不拂。也。其。古。而。不  
非。謂。能。皆。轉。法。得。其。能。中  
而。後。可。得。能。之。能。而。其。古。而。不  
步。矣。能。之。不。能。安。知。能。之。能  
正。能。正。之。能。能。矣。人。子。為。能。也。

多。痛。甚。難。矣。是。六。十。一。乘。矣。  
六。十。化。而。自。心。意。不。至。十。多。所。至。及。不  
之。心。也。手。之。不。揮。是。亦。古。為。能。也。  
得。能。之。能。而。正。之。能。能。也。亦。能。  
海。內。村。榜。後。是。矣。其。能。以。能。也。  
以。之。能。矣。其。能。矣。以。取。正。能。也。



平旦世彩云尔。

菅金毛子



八集春装

第且

此より川は、物ふくと神物  
れとふさや縄素一人は素けり  
ひより暮え一ツ見出するやけさの梅  
若水や漏る流る、月日早  
物、年れ言を吐くや、物、  
花、子、南あうり、う、お、

上



玉水を好む神や哉若梅

我々の心も七歳と在籍書神現

況しそより幼書や流路一ま

六十の春を遠く

里く乃梅を杖したる月高書

十干十二支を御座り  
わたりて又おし玉の春を遠

己々路を引きたる月高書

け曉ハ玉地も今  
引きたる月高書

清々物を花とるり神かすみ

六十一ハ東海ニ契人  
とてそらりむとを皆冠

墨院琵琶湖の春乃釋路ことし

人日

花咲ハ必はけよ口の分り利

傘此出ぬも古風を若菜は

注くそ垣もそぬハ蘇り那

口の春を好む



秋——い松子もふらふら梅うね  
折——き星も下りや茶乃夜  
山彦も菊も——茶の夜

上元

梅乃暮れかき梅のこ粥はしら

梅

梅もきやう二の十日もやうめつる  
梅も多や何折候もする

は——と云うもふらふら梅の花  
梅——い——梅もきやう二の十日もやうめつる  
梅乃花云十のいと梅もきやう二の十日もやうめつる  
山里ちと云うもふらふら梅の花  
水——い——梅もきやう二の十日もやうめつる  
梅もきやう二の十日もやうめつる  
梅もきやう二の十日もやうめつる



止

りつゝと、面をうら、しゝめの花

野梅

梅の香や酔ふるの態も揺るがし  
香半も梅干しをく、梅樹は

梅の香

梅咲く葉より梅の香、紙の香

梅

うらひすや、二丁、梅の香

梅や、風の留るに、松の香

うらひすや、葉の影、梅の香

うらひすや、二丁、梅の香

うらひすや、葉の影、梅の香

梅や、一本の梅、梅の香

うらひすや、梅の香、梅の香

うらひすや、梅の香、梅の香

梅や、梅の香、梅の香



梅

五りみき 風の定ね かしき しの那  
 うらけす 小感 一入る 柳 うさ  
 花の香 活 一 け け 梅 け  
 月ひき 月 せう 小かる 柳 け  
 け け け け け け け け け け  
 け け け け け け け け け け  
 世の中ときき け け け け け け

る 小かす 枝を 寝き や け け け  
 け 梅 や あり 一の 果ハ 又 け け け

松の花

必と さく 小も あり け け け 花  
 祖父祖母の け け 祖父祖母や 松の 花

昏雨

琴み け 末と あり け け け 雨  
 暮る け 一 満の 一 け け け ね とも



春をゆくさきさきし水底  
静るやさきさきかき母をのめ  
春をゆくさきさきし水底  
春のあり沈みこほりくも  
さるさきや花をさきし水底  
春のゆくさきさきし水底

若州 土筆

さきさきやさきさきし水底

口のさきさきさきとみし水底  
春のゆくさきさきし水底  
春をゆくさきさきし水底

かきみ

春をゆくさきさきし水底  
春のゆくさきさきし水底  
春をゆくさきさきし水底  
春のゆくさきさきし水底



不レ花ノ年ノ一ノけるハ 露ノ淡

曉月

仕立きて 早も 暮し 清く 月の 月  
おときた 鳴き 止ま 止ま 止ま 月  
海邊 止ま 露を 止ま 止ま 月  
水を 止ま 止ま 止ま 止ま 月  
山吹 乃も 水の 乃も 乃も 月  
月鏡 乃も 乃も 乃も 乃も 月

川中乃雨ニ小ノ高ノ 掛ノ月

蝶

花を 止ま 止ま 止ま 止ま 月  
蝶ノ 乃も 乃も 乃も 乃も 月  
花を 止ま 止ま 止ま 止ま 月  
川を 止ま 止ま 止ま 止ま 月  
花を 止ま 止ま 止ま 止ま 月  
蝶ノ 乃も 乃も 乃も 乃も 月



淋し 雨 葉 ころも ぬ 小 塚 へ  
登り くる あり けり 小 塚 へ

蛙

春 月 とも けり 流 ぐ 蛙 けり  
あり 似 け 席 さい けり 蛙 けり  
水 あり けり 流 ぐ けり 蛙 けり  
月 とも けり 流 ぐ けり 蛙 けり  
空 月 けり 静 けり 蛙 けり

水 あり けり 流 ぐ けり 蛙 けり

雨 忌

梅 あり けり 流 ぐ けり 蛙 けり  
子 あり けり 流 ぐ けり 蛙 けり

雨 忌

泣 あり けり 流 ぐ けり 蛙 けり  
梅 あり けり 流 ぐ けり 蛙 けり  
空 あり けり 流 ぐ けり 蛙 けり



五言

そのりり空くも長くはなを  
憂くは物おもとふるひさし  
葉のくはまふとと習やう花  
根物くくさふ花さく  
夕ぐれハ夜の低さや  
五言 葉とよふみく

彼岸

枝ももふれハのくはな  
むくさく火柱のちを  
蝶くを風の後くは  
はるかなやさき

百あ

雨のりき一味は人のひん

木

一ト時ハ



花下也 一ひふ 本は 夢う那  
大まも 夢う 一ひふ 本は 夢う那  
かゝるも 一ひふ 本は 夢う那

蕨巻

くく くれ 一ひふ 本は 夢う那  
毛く くれ 一ひふ 本は 夢う那  
かけ くれ 一ひふ 本は 夢う那  
水く くれ 一ひふ 本は 夢う那

梅

十月の 夢う 一ひふ 本は 夢う那  
葉く くれ 一ひふ 本は 夢う那  
きく くれ 一ひふ 本は 夢う那  
山く くれ 一ひふ 本は 夢う那  
疑り ぬく 一ひふ 本は 夢う那  
葉く くれ 一ひふ 本は 夢う那  
酔部 夢う 一ひふ 本は 夢う那



やいしん 動くくあり 幼さく  
を遠い田へもくしやまきさく  
何れもく 播き白し かりさく  
深草ハ京のや戸じさ月 梅

あやのま

あやのま 雨の梅うな

泰山府君

一口を夜一七のひさく

茶の花

茶乃花や 庭に 淋のつまうみ  
らのおや油乃かふる 春の 色  
茶れ花や 一葉さく 二の月  
かのをれくも 梅をえん  
茶の花や 雲き油も 松もく

野鳥

あやのま 鳥のさく



意ハ一也又紙より紙子の紙  
五丈尺蜂のけしきやきしき  
凡そいふ事も花もや籠子の声

猫の意

柳ふやういふ事あり紙の意  
紙より紙より紙より紙より紙  
をあるもいふ事あり紙の意  
さういふ事あり紙の意

燕と鳩

子の意あり紙のしきと紙の意  
凡そいふ事あり紙の意  
花の意あり紙の意  
鳥の意あり紙の意  
鳩の意あり紙の意

柳花

花の意あり紙の意



上  
さりふら道合をゆきとくの記  
白桃やめ子ゆいおさびし  
牛乳ふるし二枚や桃乃ど  
桃さや浪磨の麓の似合し  
起くユ川をさしやまのさ子  
一ツけりおめりうし  
日の柳れ麻一這入や桃のど

籬

蝶もまろく一し籬の内素が  
ものよと層のふさよ籬あまひ  
尺ハも男てきかゝるふ糸

家名

糸の戸や駒を籬あまひ

汐干

上  
蟬はく口をまかゝる汐干  
雲ハヤ山をえさや汐干



し 娘の歌ふし 忍び 伊予ヶ郡

田螺

さうかくも物さし ちかき田螺  
たよくれ 命を割る 田螺  
あうと水すむし 田螺

山吹 後

山吹や 水さし 山吹の根さし 竹  
山吹や 水さし 山吹の根さし 竹

山吹や 細代の水さし 竹  
山吹や 水さし 山吹の根さし 竹  
山吹や 水さし 山吹の根さし 竹  
山吹や 水さし 山吹の根さし 竹  
山吹や 水さし 山吹の根さし 竹  
山吹や 水さし 山吹の根さし 竹  
山吹や 水さし 山吹の根さし 竹  
山吹や 水さし 山吹の根さし 竹  
山吹や 水さし 山吹の根さし 竹  
山吹や 水さし 山吹の根さし 竹

春巻



上  
川をやは川がくく踏半  
雨後よたをこも花のりあふ  
りまやまき蛙子をあ乃泡  
おろろれは所けきくまの夕那  
流さく一羽みさうぬまのられ  
山吹を云ぬとまの流う那  
川まや花物云ぬ垣一を  
百も一羽了路くまのられ

混雑。

帳中や風乃柳ま端る時  
柳ま書唇のりぬ里をあらぬ  
音るくく小きこりく垣根う那  
坊のまや園の人くく入るれ  
島物あのをきくくし忍く朽葉小  
音とけやまの音も二之丁  
新くくく路も葉あくくすれ小



瑞々如雪と如や 春のついで  
折々たる玉露一ささる 亭夷く此  
目のさめるらん地一それ茶はこ登  
物や如しよ春の花の静うさよ  
おろふか見を男とさるはは  
柳かもしうし神をさやちるのうあ  
かしくはくんのさるを橋あうあ  
紅いりしうは舞菊の咲あうり

香とけわか——一日れりのあ  
雨うは砕をかさぬ核うあ  
子と娘——神あもおぬ 翁あ  
於ふを夜う海あり 風中  
蓮翹や峰うささる 音り後む  
目の出くまらぬか—— 呼子と  
つとく 昔のあやか—— のあ  
唯ハおぬ寺うり 小茶 花



蒲の葉や川をよみく  
つる花も家もよみく  
あゝ根をよみ川をよみ  
出代や柳をよみ  
云々  
塔の月包も  
みく

うみおとす歌ふ

みく〜 砂の浜の舟に日人の歌

四季不分

天神奉地

柿の香やふり入るに  
子の日ふも  
柿の葉も  
春の葉も  
花も  
父も



金持山天神

啓乃冬もくくや神一乃ひ

泉村石佛所

干物一と座とあり名乃乃切

根井天神

神位といふ付れさくし部

聖廟云

柄々香々切々々々龍宮々々々

少松天神

考松も少松も絶くか々々

聖廟遷祥

也々々くもくくくくくくくくく

刀尾天神

雨々の靡々々々々々々々々

湯嶋天神

切々々一頃々々々々々々々々々



上  
越後 菱原 聖廟

神ありと云ふもたし——筆澤花

越後 聖廟

まきり川をきくぬ柳が  
とき何なく様も秋のくれ

七面、

柳の香も新りあふか——七面  
まきりとも面のとくる歩の歩

百塔、

いさよとくもあや五尺乃輪のを

新川大橋現、

まき柳乃便のゆやまのあめ

四方石動宮、

よハくゆはもあや新子の声

友の壺岩

け山の麓何処か五十丁

上

下



若至寺も細

非坊や笑み舟の末葉かえ

水己山五、

海山波 望横うろく神の流

岩の八幡、

雲山子おはけふ口のあり新生云

中野白山宮、

きく山の影はむ雪のみ葉と

安居観音、

けさる子、五ふりけて白波

馬印婦、

えうりふき松のちや美人炒

安立寺裡神堂、

くらゆや梅一平乃新り歌

能列中居神杉、

一本は、秋の節や神一途



石動坐も地

新之——山の赤中の赤は

并天、

地——や卯辰乃百も巳のり

自カ尾社、

地、香やう——くはハ行 龍

天神、

喜地——八月を—— 龍 意

海向をたより花の芽の御  
し——と大蛇の着る御ハ  
み——と花い——くの紅を  
忍て十乃句をばね御忌  
れ助業は備るのこ

地獄

も——くれと粉う——くおぬと水園子

餓鬼

逐水や飲えんたれハ河 権

畜生



行足を震と去りば、枯尾舞

修羅

山彦く又編書と来りやう

人間

御龍おゆると花のまじりや那

天上

水さりのも流おと流く風中

聲聞

赤きうり月と見せをぬみり

福免

散る花と踊りく山の前より

菩薩

柳子と成象と化しつ花の雲

佛界

山吹く仕上る光るを界り那



國滿寺の草堂大心法師

大心乃法師のひかりのさうり

日甚親の心を

松風おのの入る時かきしとの声

葉のさゆふの心を

蓮のさゆふの味の雨のさゆふ

夏と部

更衣

衣すくすくおふもあつゝ 更衣

栞守者二人いそゝ 給う那

綿糸やまゝぬをぬ糸夫人

琵琶をさる孫もいそゝ 更衣

くゝおさやまゝ廊下もさるのさ

能因ハおさるゝおさやあつゝか



釣竿不羨しぬ速や 文衣  
老如也ハ定る日か 一ちもか  
枯梅乃とらぬ日あり 文衣

子規

おとよみ毎處の花も玉も  
昔ふもも月をば 時を  
子規來たき音なり 流し  
一ひりきぬ葉を 杜宇

石のく 東法をあるを  
時を 昔もハ かなは  
故乃 吟よの力や 杜宇  
いと 一人き 葉を 子規  
きハ 歌ハ 歌ハ 歌ハ  
骨魂 一 海を 走る 故  
翁公 立た 二日 不 子 規  
杜宇 二十 九日 七 弟 利



上  
ちを成 葉は 八 橋 けり ちを ちを

結子祝

時 多 友 の ち けり 七 善 乃 秋

灌佛

宵 中 けり けり けり 出 けり 花 水 堂  
母 けり けり けり けり けり けり けり  
まの けり けり けり けり けり けり けり  
寺 の けり けり けり けり けり けり けり

けり けり けり けり けり けり けり

けり けり けり けり けり けり けり

けり けり けり けり けり けり けり

杜若

早 けり 女 の 踏 ぬ けり けり けり けり

杜 若 水 けり けり けり けり けり けり

けり けり けり けり けり けり けり

杜 若 けり けり けり けり けり けり けり



杜若にけりてめで時をわたりて衣  
水のさへくもあてらやかきほも  
かきほもさかぬもほろあくろが  
杜若清やかにうれ中一のあ

卯のむ

卯のさやそのかき葉の清り  
卯のさやさハあきく山めり  
卯のさやさあきく山めり

卯のさやさあきく山めり  
卯のさやさあきく山めり

卯のむ

皆碎く松柳さく杜若さの  
美人のさくらのさくさく

卯のむ

京へさく半七屋や見車  
吹ぬりのさくあきく山めり

上

下



若葉

若葉く 若の若葉乃 若の若  
若葉をきく 若の若葉乃 若の若

筆

若の若葉乃 若の若葉乃 若の若  
若の若葉乃 若の若葉乃 若の若  
若の若葉乃 若の若葉乃 若の若  
若の若葉乃 若の若葉乃 若の若

若葉

若葉乃 若の若葉乃 若の若葉乃  
若葉乃 若の若葉乃 若の若葉乃  
若葉乃 若の若葉乃 若の若葉乃

若葉

若葉乃 若の若葉乃 若の若葉乃  
若葉乃 若の若葉乃 若の若葉乃  
若葉乃 若の若葉乃 若の若葉乃  
若葉乃 若の若葉乃 若の若葉乃



けしきのこ

酔くまへ 扇あひやあしらの花  
遊人乃 影をさしやけしきの花

行く子

けしきのこ 盛るとはかきりこ子  
行く子 何れ道もあはれ 後より  
初道とを舞をせぬ物ありりこ子  
行く子 されはるるきりこ子 又

田植 青田

水きりよ 素よりいふは田植が  
影影も 植む山田の夕日外  
影乃 尺やち又 吟をそ田より外  
湖と 舟ののくと 田植りか  
影影 根をかくまをく 田植り  
田植 舟 船より 満る部を  
三尺 乃 換も 影をく 青田が



新くくぬく振かきくき田は

端午

一徳を福とぬきさやあやめ所  
水うけくさるや五尺のあやめ所  
かれ飯をさみきささうりあやめ所  
きさうふさるあめの花の懐う那  
所あやめ花らんぬ里も糍う那  
濃くとも風を流すあやめ所

黒くりくくさるくやえあやめ所

去年ハ幾回も梅をさす

角りくくさるくあやめ所

青梅

青梅くくさるぬ凡の白ひう那  
青梅やタマシ只の雨かき  
青梅や花あき枝をく

五月雨



あゝおの境しつと境や五月雨  
 五りるや半れもさうハ水車  
 さみきれや五條の橋下澄一羽  
 暖の山低ふしつと五月雨  
 五月るやもや成乃上水の水の泡  
 藤のたつ流定よ五月をれ  
 五りるや境のわたり水の地  
 五月るや流葉しつと居鳩半

五りるやりのの羨るりのりど  
 五月雨や禮出て水草をさけ

五月雨

五月雨もやりのの羨るりのりど  
 あらさるや蝶、煙根の舟車送

若竹

五月雨の雨一時もあつと  
 五月雨の雨一時もあつと



くゝの薬の代り代り来るといふ  
さへけりやまゝの角子さへ出ると  
一

丹良

塩出しで磨るゝ年れ當り部  
計量何むの粉々一 散々ゆらゆら  
ゆらゆら一入 登るゝさへ  
さへは終迄おろし火を消さぬ  
ゆらゆら大子おろしくはらふ

豆菊

豆菊を焙棄てあまひさり  
さへりり一散り酒と成りさる

蝸牛

起くを拾いぬ角や蝸牛  
栗土の厚のけしち蝸牛  
くゝゝゝゝ角とくゝ蝸牛  
湯神の家と干り蝸牛



新句

佛法乃吾の身を我に移す  
亦く世に曉白し新句  
新句のしる火と體新句

流る雨

其息も雨の如く流る雨  
不二も雨の如く流る雨

蝉

蝉のこゝろと  
蝉のこゝろと  
夏の聲のこゝろと

百合

花のこゝろと  
花のこゝろと  
水も花のこゝろと

暑



川島の所かゝあへる 雲の能  
おとら—き 麓の山 似る 雲の  
影切も身ぶらうとあへる  
ふ切乃包もかちたあつた  
近そりし 先へまゝに 居る

夜月

落乃 籠きもの ちあひの月  
かゝの 圓く 圓扇かゝる ちあひの月

氷室

京へ 出く 麓一時乃 氷室に  
走り出く 麓かける 氷室に  
よの字を見く 山を 氷室に  
連なす 山と 氷室に  
曉の 鐘 氷室に

羽脱色

雲散り 跡を けり



夕暮とあ〜ぬ〜  
おぬい

清水

清水も〜清水乃清水  
水も〜根の通る清水  
塩尻〜新〜清水  
鏡〜飛〜名所の清水

夕暮

夕暮〜夕暮

夕暮や〜夕暮  
夕暮や秋を〜夕暮  
夕暮や〜夕暮  
夕暮や〜夕暮  
夕暮や〜夕暮  
夕暮や〜夕暮  
夕暮や〜夕暮  
夕暮や〜夕暮

夕暮



西影乃鏡もねも異一十土車  
土車平やまるとくハ草のま  
土車平や田力のソけね急の山

清骨

清骨や色かれそやうりこ子  
流るる清水もねるる清骨を

初涼

涼一さ乃雨とを流るるさうりが

す一さや扇涼一の花もみち  
極出一ホ又一取やすみみ  
涼一さや柳も一葉紅花

夏歌

夏只やさうさく踏みぬ砂の上  
夏、日や扇物垂れあけさうと  
清骨や忘るるやう雨の雲  
夏只やあひつりる香あけ



岸

涼草のや おりり 枕のぬ山乃 歌  
うき草のや おりり 水うきく  
岸や 穴も ぼろくぬ 二日 月

雲の朧

地を 去れを 花と するぬ 雲の 朧  
夜も ありハ 花と やいん 雲乃 三ぬ  
湖の あれり と 湖 雲乃 三ぬ

橋 九里ハ 町 花の 朧  
うきすの 声と 山む 花の 朧

花子

花子 花の 朧の あつぬ と 朧  
花の 朧の 朧の 朧の 朧

白雨

夕ま 花の 朧の 朧の 朧  
花の 朧の 朧の 朧の 朧



夕まや糸のふせのふせりし

換

極きくや田よも畑よも人乃るや

ふせの山はふせり 換のむ

終おもしろきや極の花

換

終おもしろきや極の花

終おもしろきや極の花

終おもしろきや極の花

換

終おもしろきや極の花

換

終おもしろきや極の花

換

終おもしろきや極の花

換

上



何々の松原... 山

龍の滄洲 就、

雨乞やや切... 山

木塚、

木塚やふく... 山

龍改ニ茶

龍改ニ男はく... 山

春や人の... 山

あまよりの... 山

芙蓉の鑽

時... 芙蓉の鑽

芙蓉、

翠のくふ... 芙蓉、

芙蓉、

日く... 芙蓉、

あまよりの... 芙蓉、



枇杷

厨為よさあつハ枇杷をなす

願吸の三笑

喜梅や好と好ひと好ぬひ

三州音の

三州音の

夏をと三尺刈く三葉ハ

一甲松小茂とりの

亭凌ハ又ねくくのり龍う那

大笠のりは中代大長  
煙子ちんが

夕まや幾人さうとがられ

堂塔のねく音界あり  
しきとちんが

しきおとちや四百八十寺

をさ芦雅袋と出たて歌  
あり

芦れ茅や誰えたるぬさ

雨乞小町の積

うらひすけりるるる夕ま



松茸不浄の扇

ふきくく 浄くも一あ——山うの

その松の地の形

川橋や 横は八人 乃きくく 山

神社の畔古くは祝

いさふくはかりぬなや 祝すく

後祝の語

後——祝か——く——月己く

常陸塚を修つて

きくくこれ 中くくくくくくく

池州松川くぬくめを乃  
きんをくくく

香折もとくきく——ぬくめ

自画像

千里の外お又ふり星ありく  
江橋をか——くくくくくく  
お似く

けくくハ又 途く 山あり 雲乃 山

云福神の像

上

RLM



福川 了 記 くらん 念 にかう くらん

長春 せうしん

蝶 くらん びり ねや 花 蕾 薇

夕暮の 霞

二 尺 と 八 咫 一 初 の くらん 暮

殿 初 くらん 時 刻 を もとめ けき くらん 卯

道 の 心 藤 花

ねま せし くらん てる けれ 蓮 の くらん な

すく くらん くらん くらん くらん くらん くらん

藤 の くらん や 笑 一 くらん 念 くらん くらん

藤 の くらん や くらん くらん くらん くらん くらん

夕暮 くらん

夕暮 くらん くらん くらん くらん くらん くらん



流るるや河の流るる風よ

河後

元き流るる流るる流るる河  
望るる流るる流るる河  
流るる流るる流るる河  
流るる流るる流るる河  
流るる流るる流るる河  
流るる流るる流るる河  
流るる流るる流るる河

混雑

去先了 新玉乃 娘や けくま 瑞  
流るるの子を 流るる 似るる 流るる  
川 流るる 流るる 流るる 流るる  
流るる 流るる 流るる 流るる 流るる  
流るる 流るる 流るる 流るる 流るる  
流るる 流るる 流るる 流るる 流るる  
流るる 流るる 流るる 流るる 流るる







画讀

笏の續

子<sup>コッ</sup>のゆやそもそぬの花一枝

土籠、

鶴とひいて懐きよ土籠

而袋のあはし

袋々々子ととき出す分涼し舟

霧の弦

独吟吾仙

秋まひく<sup>一</sup>唾盡くくおるのき

垣中<sup>一</sup>戸や<sup>一</sup>苔の層月

角力<sup>一</sup>く<sup>一</sup>走るは<sup>一</sup>手<sup>一</sup>揃ひ

機<sup>一</sup>あ<sup>一</sup>さ<sup>一</sup>る<sup>一</sup>み<sup>一</sup>の<sup>一</sup>想<sup>一</sup>板

二<sup>一</sup>ら<sup>一</sup>ふ<sup>一</sup>と<sup>一</sup>吹<sup>一</sup>お<sup>一</sup>る<sup>一</sup>松<sup>一</sup>乃<sup>一</sup>上

何<sup>一</sup>も<sup>一</sup>鶴<sup>一</sup>の<sup>一</sup>後<sup>一</sup>乃<sup>一</sup>分<sup>一</sup>乃<sup>一</sup>上

上

上



糸起乃おもしりぬえりけり

華しき喰ふたふりや

友子畑より作る換へる物

錦より細張の暖織の縁日

去月うと卯米もせぬ人

何お留ても先無さう

見のまにきほくくいと

摩ハ昔もあよおひと

言次より西川もおひし

おくとくくくく

おむり勢の終ひく

茶を八替く五十二の菓子餅

御嶽の土は名く朝乃雨

帝陵の祖父の諸人泣す

一也の終へるあらし

紙、梅もあらし

上

下



きとー滝の音もいかに  
けりーと縁の聲も  
何時そなく知らぬ静りぬ  
きぬや竹田の音も  
懐かしくもいとるやの縁  
細流の音もいかに  
七つの子の音もいかに  
流るもいかに

あつたの縁もいかに  
きぬをいかに  
けりぬもいかに  
きぬもいかに  
けりぬもいかに  
きぬもいかに  
けりぬもいかに  
きぬもいかに





